

ある女の手紙

永代美知代

(一)

少し寝坊をし過ぎて、九時頃にやつと朝仕舞を済ませると、お整さんも私もいつもの通り、裏縁の日當りに坐つて、頭髮を梳きにかかりましたが、二人とも始終だんまりで、口一つ利かうとはしませんでした。

「私をこゝらを歩いて來ます。」

ぶつさらばうな物言ひはお整さんの癖ですけれど、だしぬけに立つて、勝手口の汚い水下駄を穿いたなり、横手の松林に添うた小徑をさつさと歩いていらつしやる。

「ふん、何が氣に入らないんだ。どうとも勝手にするがいい。」

私は此頃のお整さんの爲打が腹立たしくつて堪りません。別して今度の事件が起つて以來、ひがみ根性か知りませんが、私は如何してもお整さんが私に好意をもつて居て下さると思はれません。

今度の事件、それはまだ氣分がむしやくしやばつかりして居て、御通知もしませんでしたでしたが、實は五日程前の朝、あの佐伯が訪ねて参りましたの。

私はまだ寝て居ました。いつも早起のお整さんが、眼をこすりながら臺所の水戸をお開けになると、いきなり「美彌さんは居ますか」と聲を掛けて、昨年の暮別れたきりの佐伯が、ずんずん座敷へ上つて、お整さんと二人で私を呼び覺すんです。私は目を開いて佐伯の顔を見るなり、はッとして困つて了ひましたけれど、今更逃げかくれする訣には参りませんし、強ひて氣を落着けて、次の間の三疊でお話することに致しました。

お整さんは如才なく、始終佐伯に笑顔を見せて、お茶を運んで下さるやら、朝御飯前でせうからつて、わざわざお向の荒物屋で鶏卵を買つて來て御馳走して下さるやら、私はお氣の毒で、間が悪くつて、如何して好いのか、只はらはらとして目先が暗くなるやうに思ふのでしたが、これではならんと一しよう懸命氣を鎮め鎮め、佐伯の話を聞いて居ました。

佐伯の云ふには、自分のこれ迄の考は間違つて居た。つまり近代思想にかぶれて居たので、今はもう

行く處迄行つて引返して來た。蟲の好い云ひ草だけれど、今一度同棲して呉れないか。と斯う事をわけ、別れてから殆んど半年間の、思想の變遷を委しく説明しますので、最初の程は私も何を云ふか、何と云つたつて動かされる事ではない位に聞いて居ましたが、段々聞いて見れば領解も出來、殊に別れるやうになつたそもそもは、同じく自然主義にかぶれて居ても、私は先生から教へられた通り、藝術と實行とを別々に考へ度いと思ひ、佐伯はまたK先生の態度を——つまり自分に勝手な都合の好い事は之を實行し、反對に不利益と見るときは藝術は絶対に觀照だと稱へる、さうしたやりくちは嫌だ卑怯だと云つて、藝術と實生活とをびつたり一つに行かうとする、それからしての衝突で、お互に氣狂ひのやうになつて、自分々々の意志を主張して別れはしたものの、考へて見ると、如何してあれ程熱烈な戀で、あれ程の犠牲を敢てして迄結婚したものか、ああもたやすく別れられたものか、私はいつそ不思議なやうな氣もして、時には氣も狂ほしいまで、とりかへしのつかないあやまちを爲出來したやうにも思ひ思ひするのでした。

ですから今佐伯から、自分の考は間違つて居た、と折れて出て、今一度同棲して呉れと云はれて見ると、全く佐伯の云ひなりに従つて、曾ての夫、曾ての戀人の云ふ通りにするのが女の道ではないかとも思はれて、よし又自分の考へて居るやうに、同棲した後、佐伯が今日の言を食んで、理想通りの生活をする事が出來ないとしても、少しでも今の佐伯をして、より満足な生活を營ます事が出來たならば、私はどんなに嬉しいでせうか。

それは理想であつて、又失敗して失望しなければならんのかも知れません。けれども私は構はない、どうせ斯うして暮して居たつて、心から満足して、自分自身に忠實な生活を營んで居るんぢやありませんもの。

私程の我儘で、私程したいままの事をして來たものが、どうして今の生活に對して、こんな不平が云へるかと、乾度不思議にお思ひでせう。いつてしたか、K先生から、餘りお整さんをいぢめないやうにと云はれた事がありました。其時の残念さ。私がいつお整さんをいぢめたでせう。こんなに氣を兼ねて小さくなつて居ますのに。

K先生。お整さん。

私は云ひ知らぬ壓迫を感じずには居られません。それを考へると身慄ひする程嫌です。K先生の事について、これまでつひど何も申上げたことはありませんから、だしぬけにこんな事を申上げたら、定めし定めし嘘だと仰しやつてお信じなさらないかも知れません。併し此頃は文士の遊びぶりだとか何とか、其外にも段々K先生の御放蕩について書き立てる新聞雑誌がありますから、もうそれを御覽なすつていらつしやるあなたは、私の手紙を見て、さては全く然うかと御歎息なさるでせうと思ひます。

實際歎息せずには居られません。私は此頃K先生の御態度を見るにつけ、晩年のK先生と云ふ事が何故だか甚く思はれて、もしや先生は狂氣におなりなさりはしないか、いやもう少々狂つてらつしやるのぢやないかしらとまで心配致してゐるのです。

お整さんもこの事では矢張り心配して、どうかK家のために、お子達のために、先生が今少し考へて下さると好いと、始終話し合つて居ります。

K先生は此頃「動物園」と云ふ短篇を書きになるさうで、それは今年十歳におなりのお袖ちゃんから、貞一さん、俊作さん、お才ちゃん、それから今度お生れなすつた赤さんと、皆でわあわあ泣く、騒ぐ、わめく、その様子がまるで動物園だと云ふので、母さんを馬鹿にしきつて、弟達をいぢめて、家中をあはれ廻るお袖ちゃんには差當り沸騰だと仰有るのです。先生の事だから思ひ切つた御觀察もあり、面白い作が出来て来る事とせう。併し私は此「動物園」のお話を先生自身のお口から伺つた時に、ふとある事を思つて、何とも云へぬ苦しさを感じたのでした。

お袖ちゃん「動物園」の沸騰なら、家庭に於けるK先生は何だらう。

以前私が初めてK家へあがつた時分のK先生は、それはそれは藝術の権化かとも思はれる程純潔な方でしたが、此頃の醜態は如何でせう。藝者狂ひにうつつも抜けたか、毎日のやうに待合入りばかりして、お子達の手前、弟子の手前も憚らず、平氣で藝者だの、もつと賤しい女共だのの噂をして、あの女は寝顔が好いから如何の、その女は長襦袢一枚で懷に這入つて来る處がたまらないのと、聞いて居ても眞赤になるやうな甚い事を仰しやる。だから、まだやつと十歳やそこいらのお袖ちゃん、ちやんと男女の秘密までを知つて居て、早く奥様になりたいの、私は軍人が好きだから世話をして下さいのと、近所の奥様達に話したとか頼んだとか、そんな風になつて行くんぢやありませんか。

奥様は奥様で、おもしろくもない顔をして、寝たり起きたり、つまらないつまらない日を送りなされる。家の事も手につかないと云つた有様でいらつしやるのは、無理もない事だと思ひます。だが誰一人奥様の味方になつてあげるものはありません。八幡町のお母さんの外は、實の姉さんの荒井の奥さ

んだつて、「あれぢやあどうも」つて仰しやるんですもの。先生の弟の武夫さんは「なあに嫂さんのつとめ方が足りないからさ。あんな細君つてのがあるもんぢやない」と一口におけなしなさる。私だつても、奥様が可愛さうで、先生の態度が悪いと憤慨し切つて居るのですけれど、それでも奥様の味方にならうとは思ひません。どころか、奥様が、しつかりして居て下さつたらと残念に思ふのです。まだ先生が放蕩を初めにならない時分、書生も居れば、下女の二人も使つて、お子様はあつても手が足りないといふ程ぢやないのに寒中に先生がつとめ先きからお歸りなすつても、平常の召物は何處にあるのか。押入を自身に探してお召しになる位。一度だつておこたにかけて温めたのを、ふうわりとかけおあげなさると云つた事はあつた例がない、誠に人の好い方だけれど、熱くもなければ寒くもない、味も何もない。先生が藝者を買つて、それを殊更奥様の前でどうの斯うのと仰しやるのは、どうかして反響を聞きたいと思ひなすつての事かも知れないと、私は最初のうち思つて居りました。もしさうなら近頃は十分お焼きなさるやうにもなつたのですから、先生は御満足かも知れません。

「ねえ美彌さん、私此頃のやうぢやとてもたまらないわ、如何したらいいんでせうね。」

と斯う死んでも足りないやうな事を云つて、泣き言を仰しやるから、お整さんと二人でそれとなく遠廻しに先生をお諒めして居ると、横から奥様がふいと口を出して、くだらない事で話の腰を折つておしまひなさる。そんな時、きまつて先生は私達の顔を見て、ちよいと肩でお笑ひになる。

だからもう奥様は奥様として置いて、先生にだけでも云ふだけの事を云ひませうと、種々苦いことを申し上げると、「男が藝者を買つたり、いろんな道樂をしないのは働きがなくて出来ないからしないので、

働きのある男は誰だつて皆な放蕩もすれば藝者狂ひもする。つまり金が澤山に這入ると云ふことが悪いんだね」ですつて。

其辯此間も「どうだ、此様な本を作へたよ。立派な美しい本だらう」と仰しやるから。見せて頂くと、近畿名所案内とか何とか、くだらない。小説の本でもある事か。

「先生は金が這入るから悪いんだねつて仰しやつて、小説家の辯にこんなもの迄お出しにならないでも好いぢやありませんか」つて云ひますと、流石に變な顔をしてらつしやいましたつけ。そんな風で、お整さんも私も根柢から感心しないものですから、赤松君をよんで來いと云ふ事になつて、下女が夜の九時過ぎから提灯をととして、わざわざ新町の尼寺へ御使者に立つ騒ぎ。赤松と云ふのは御存じてせう。あの脊の高い、苦蟲をかみつふしたやうな顔の、早稲田出の男で、此頃は新町の尼寺に下宿して居て、その近畿名所案内も大分赤松が手傳つて拵つたんださうです。此人は以前から妙に先生のお氣に入りて、赤松は眞面目で好いと始終云つてらつしやる。奥様もいつか一度、芝居の話が初まつた時、赤松が「今度は是非僕が歌舞伎座へ奥様を御案内致します」と云つたのを本氣にして、赤松さん赤松さんと頻りに頼もしがつてゐてなさる。そのくせ奥様は芝居には餘り趣味のない方なのですが、つまり赤松さんは親切だと云ふので。

下女が迎へに行つた時、赤松はもう寢て居たのを、又起きて早速出掛けて來ましたので、座敷へ通してピイルを抜く。おそばを出す。私達二人はそのまゝ失禮して歸りましたが、道々お整さんは何を考へなすつて居たか、月はあつたかなかつたか、兎に角雪あかりで明い上に、道も凍つて居ましたから、

足下の心配もなく、黙つてこちこちお歩きなさる後から、私は赤松、佐伯、山村と、此三人の男をくられて種々な事を思ひました。

佐伯は私とあつた關係で、そのためあの通り五先生から憎まれて、先生が自分から私の養父になつて、云はばまあ婿と云つた關係の時代でさへ、終に佐伯に對する感情を解かうとはなさなかつた。

山村はお整さんの戀人。併しこれは秘密です。五先生だつて親密だ位に思つて、まだはつきり戀人かどうかは御存じないのかも知れないんですから、誰にも仰しやつては困りますが、私はお整さんから聞いたのです。お整さんも今は破約したとか何とか云つてらつしやる。だが兎に角、山村と云へば「文學界」の投書家中の白眉で、上京した最初五先生を頼つて來て、「文學界」の訪問記者にもして貰ひ、だいぶお氣に入りてお世話も受けたのでしたが、お整さんが上京して五家に置いて頂くやうになつて以來、急に覺えがめてたくないと云つた訣になつて、「どうも山村は老成的でいかん」と仰しやる。

私は赤松が山村の代りにお整さんの戀人であつたら如何であらうと考へると自然微笑すには居られませんでした。

併し山村も可哀相に、お整さんの話によると、本當に破約されたらしいんです。お整さんと云ふ人は頭から胸から誠に冷い人で、都合で戀人を突放す位は訣なく出來る人なんです。

あら何だか下駄の音がして、お整さんが歸つてらつたやうですから、又後程。

(二)

やつぱりお整さんでした。そこいらを歩いて來ると仰しやつたから、正直にさうかと思つて居ました。

ら、五家へ行つていらしたんださうです。尤も私も若しや位は考へてました。なに如何だつて構やしない、行きたければ幾らでもいらつしやるがいい。だけれども私が憤慨するのは、うそをついて散歩だなどと云はないでもないだらうと思ふのです。

「そこいらを歩いてるうちに、つひ五家の近く迄行つたんだから、一寸と寄つたのよ。先生がお出掛けになつた丁度其あとでね、奥様の泣言をさんざ聞かされて、うんざりしたわ。何故先生はあんなのてせうねえ。」と散々そんな云ひ訣澤山な事を云つたあげくに「ああそれからね、先生が是非逢つて聞き度い事があるからいらつしやいつて。貴女今晚にも行きませうね。あれきり何とも相談もせず、兄さんの意見と云ふのも仰しやらないもんだから、先生心配して怒つてらつしやるわ。」

「え、だけれども私まだよく決心がつかないんですもの。まあもう少し獨りて考へさせて頂戴な。」

「だけれども今晚はいらつしやいよ。」

しつこく云はれるので、私は殊更面倒臭いと云つた風に次の間の三疊に避けて、又此手紙をかきにかかりました。

實際どうしたら好いのか、私は考へるとくしやくしやくして來ます。

如何しよう。と云つたつて、前にも申し上げました通り、佐伯の云ふ通り同棲しようとな九分九厘迄思つて居りますの。あとの一厘は五先生に對し、お整さんに對し、國元へ對し、そんなこんな的情實から來た煩悶で、これだけなら無論思ひ煩ふ事も何もないですけれど、別に又不安もあつて、さうたやすくは決心が出來ません。それに決心のつかないうちに先生の前に出るのは、如何あつても嫌です。現に一昨々

夜も佐伯が來た事を云つて御報告にあがると、

「何を考へるんだ。男が來る事は知れ切つて居て、寧ろ來方が遅かつた位なもんぢやないか。一旦斯うと決行して置いて、今元へ歸らうとする。そんな奴と僕はどうしたつて齒する事は出來ん。だから若し貴女が佐伯と一緒にならうと云ふなら、僕あ知らん。決して僕の手から佐伯に渡す事はしないから、但し貴女が僕からのがれるなら爲方ないが。」

と劈頭第一に怒鳴つて置いて、

「貴女も何だ彼だ云つたつて、やつぱり男が訪ねて來て、甘い事を云ふと悪い氣持もしないと見えるね。」だの「そんなに直ぐ亭主心が附いちや駄目だ。」とか散々毒づいた後、

「また實行の渦巻に卷込まれようとする。駄目だなあ、實に。僕が貴女に自然主義を説き出してから幾年になる。まだ解らないでは情ないぢやないか。だから男に馬鹿にされるんだ。確乎して、復讐するな。今だ。うんと佐伯を辱めてやり給へ。」

「だけれども先生、美禰さんは些少も佐伯さんを怨んでないんですから、復讐の要はありませんまい。」とお整さんが仰しやる。

「驚いた、怨んでないのか、ほほう。」

私は掻きむしつても足りない程胸がむしやくしやる。佐伯を怨んで居ようと思つた私の勝手だ。何もお整さんからとやかく付度され、吹聴されなくなつてもいい。全く私は佐伯を困らせようなどと思つた事はない。別れて後も、どうか餘り亂暴な酒を呑んで體をこはさないようにと、蔭ながら念じて居た

程で。それは嘗に佐伯ばかりではない、見ずしらずの人でさへ、惡かれとは思ふ事が出来ないで、素行の修まらない人を見れば、直接自分に關係のある人か何かのやうに憤慨し、氣をもむのが私の癖ぢやないか。何も此場合特に佐伯を怨んでない事を吹聴して、暗に私が佐伯に未練でもあるやうに云はなくては好ま相なものを。

「ねえ美禰さん、いい加減に思ひ切つた方が得ですよ。あんな方に未練を残してつまらないぢやありませんか。」

果して奥様迄がこんな事を仰しやる。

「おい、女の操だなんて古臭い考に支配されてちや駄目だよ。だから貴女は馬鹿だと云ふんだ。些少鵲外の「一幕物」でも讀んで見たまへ。獨逸あたりにや如何な女が居るか。僕あ男から欺されて居るやうな女は嫌さ。男を欺して散々弄んで惱殺しようと云ふ女が好だ。佐伯にまた欺されて、散々失望して、一生他人の犠牲で終る。貴女はテヤにならうと云ふのか。つまらないぢやないか。考へて見たまへ。え、おそ。」

「美禰さんにも似合はないぢやありませんか。足下の明るい内に別れて了はないと飛んだ馬鹿を見るもんですよ。私が美禰さんなら、それはもう、うんと強く出て決して未練なんぞ残しやしませんね。そりやあもう私はさつぱりしたもんだ。」と又しても聞き苦しい奥さんのさし出口。此人の云ひ草は聞きづらしばつかりで、何を云はれたつて、少しも何とも感じはしないのです。

「今こそ佐伯が何とか彼とか云つて居たつて、いつまで一人の女の尻ばかり追つて居られるもんぢや

ない。生活のため仕事もしなければならんし、其内にや又、別に情婦も出来る。貴女にしたつて佐伯との關係さへ断たれりや、どんな良縁がないとも限らないぢやないか。」と先生が仰しやる。その言葉にうつして、

「だつて此人は佐伯さんがさうなつて行くのを見て居られないんだから爲方がない。」とお整さんが仰しやる。何處まで毒々しいんだか。

これは一週間ばかり前、お整さんと二人で青山の岩瀬花枝子の下宿を訪ねたとき、新しい何とか雑誌に若松みどりの歌と雜文がのつて居て、其歌と云ふのは「君たちの娛樂に足らばしたまへと美しき身を魂を投ぐ。」とか云つた甚い歌で、雜文と云へば又男と一緒に旅宿を泊り歩いた事をさも得意氣に書き立ててあると云ふ風なので、例の癖の私が直ぐに憤慨して、世の中にはこんな甚い女があると甚く罵倒した。その若松みどりが又、佐伯、福來兄弟と云つた若いサアクルの間に交つて、誰にでも接吻させたりなどする事を、以前お整さんに話した事があつたので、それを變に私が焼もちでも焼いてるやうにあとりになつたのかも知れませんか。兎に角變な物の云ひ方で、私は癪で癪で堪らない。

だが若松みどりが若し本統に佐伯と關係があつたと聞いたたら、私は平氣では居られない。屹度好い氣持はしないてせう。

併しお整さんからそんな事を推測したり、云はれたりするのはどうも不愉快だ。

「そんなに未練があるんですか。」

とおひやら化したやうな先生の調子です。私は唇を噛んでいつまでもいつまでも黙つて返事をしません

てした。

「談話は抜きにして、おい美禰さん、如何しようつて云ふんだい。僕あ貴女が國元から離れ、僕から離れて、そんな危険を敢へてしてまで佐伯に行くのは貴女のために不利益だと思ふ。第一佐伯が、初めに僕の處へ来ないで、貴女の處へ直接行くと云ふのは如何云ふ訣なんだ。そんな法はあるまいぢやないか。」併しそれは先生と意志が疏通して居るのなら兎に角、互に喰ひちがつて、とても話のまとまりつがないからぢやありませんか。私は斯う云つてやらうかと思ひましたけれど、黙つて何も云ひませんでした。

「さあ、如何するかねえ。何とか決めたら如何だ。」

「だつてまだ決心がつかないんですもの。」

「あんなに云つてもまだ解らないのかねえ。それぢやまあ兄さんの意見も聞いて見るさ。」

それで其夜は別れて、翌日私は本郷の兄を訪ねました。兄に一通り話しては見ますが、學校教師で温厚な君子と云つた風な男ですから、私は此兄から、確乎とした意見を聞かうとは思つて居ませんでした、新宿から山の手線の電車に乗つて、巢鴨で下りて、あの腦病院の赤い長い煉瓦塀に沿うて歩く間も、私はひとりで、どうしたものかと思ひ煩ふのでした。

本郷へ行つて見ますと、朝早く来たつもりですのに、生憎兄は出勤時間の早い日だと云ふので、もう學校に出掛けたあとでした。正午迄には濟んで歸る筈だからそれ迄待つたらと強て嫂がとめますし、私も何だかがつかりして甚く疲れたやうなので、嫂と二人奥の炬燵に差向つてあたりました。

何故そんなに考へてらつしやるの。心配事でもあるんぢやなくて。と親切に訊いてくれますので、此嫂に話したつて仕方もないと思ひましたが、

「實はね、相談があつて来たんです。」と今度の事件をざつとかいつまんで云つて、自分は今一度元々に歸つて見ようかと思ふと云ひますと、

「左様ですともねえ。佐伯さんが折角さう云つてお出でなすつたんですもの、K先生は何と仰しやつても、私らの考では女の操は大切だと考へられますからね。斯う一も二もなく云ふのです。」

「ですが、さう單純な訣にも行かないのよ。種々考へなければなりませんから、私もどうしたらいいかと思つてね。」

「さうでせうね。」

そんなこんなで半日暮しましたが、一時頃に兄が歸つてきたので、相談しますと、兄も私の意見と同じに、元々に歸つた方がいだらうと申しますので、尤も、兄はそんなに急にしないでも、佐伯の云ふ通りに歸る事に約束して、暫く佐伯と交際し、これなら大丈夫と思つた時改めて結婚しろと申すのです。まことに立派な考ではありますが、K先生が之に同意なさるもんぢやない。と云ふのは書き落しましたけれども、既に昨夜の會見て、こんな事を仰しやつてゐるんですもの。

「何だつて佐伯と會つたんだ。絶対に會ふ必要はないぢやないか。お整さんもお整さんだ、無暗に男に踏み込まれて、最初二人で家を借りる時、何のために貴女の名前にして置いたのか解らないぢやないか。これから始終佐伯が訪ねて来るだらうが、斷じて會ふ事は出来ない。併しそんな事云つても駄目だから、

美彌さんはこれから僕の家へ来て寝るやうにするといふ。」

私は其時思はず肩をゆすつて、さうまで腰迫されなくてもいいと心で思ひました。實際佐伯が幾ら訪ねて来ても、元々通り一緒になるまいと思へば、幾らでも逢はないで済むし、又逢つたつて構はないぢやありませんか。よし又佐伯がK先生の思つてらつしやるやうな解らず屋で、亂暴をするやうな場合には、何處がかくれるなり如何なり、私だつて馬鹿ぢやないから、その位な工夫はあらうと云ふものです。それはそれとして、兄からあと一時間ばかり自然主義の排斥論を聞かされ、K先生の御行爲を例にとつて、私がK先生でもあるかのやうな責め方をせられ、最後どんな天才でも時代の思想に一寸はかぶれるものだが、佐伯君も早く覺醒して引返して來たと云ふのは幸福だと云ふのでした。

兄と云ふ賛成者が出來て、歸つて見ようかと思ふ私の心持は、それは幾らか強くもなりましたが、それかと云つて、はつきり歸つて見ようとはまだ決し兼ねるので、どうも不安が伴つて、歸つて同棲して、また家庭に囚はれるのが嫌なやうな氣持になり、佐伯も私も自分に忠實な生活をしなければならぬと云ふので、云ひ出すやうな事はないだらうか。赤い練瓦の腦病院の前を通る時には、私は矢張り、今朝來る時と同じ問題を繰り返し繰り返し考へてゐるのでした。

夕方代々木の奥の家に歸つて見ると、お整さんはもうちやんと晩御飯のお膳立をして、其傍で雜誌を讀みながら待つて居て下すつて、兄の意見は如何だつたとお訊きになる。それから食後すくにもK家へ行かうと仰しやるので、どちらつかずの生返事をしてゐると、好い鹽梅に其處へお整さんの姉さんが、同じ女醫學校のお友達と云ふのをとれて遊びにいらつしたものですから、私はK家行きをおぢやんにし

て了ひました。十時を過ぎて姉さんが歸りかかると、お整さんは葉書を二枚書いて、それを入れ、其處まで送つ行くと仰しやる。ポストはお存じの通り田圃を越えて新町か山谷の通りまで出ない事には、一つだつてありやしないてせう。夜遅く行くのはよいとしても、歸りが氣になるから送つて貰はないて好い、葉書は序に入れといてあげると姉さんがおとめなさるのを、無理に、どうしても行かなければならぬ用事もあるからと云つてお出掛けなさるので、私はまたK先生へ行くんだなと思つたものですから、「お整さん、先生には何も云はないて下さい。兄の意見は兄の意見で、私はまだ何とも決して居る訣ぢやないんですから。後生。」

斯う云ひますと、如何てせう。

「私が何時貴女の事を先生に云ひました。ええつ、くやしい。行きませんよ。行かないて下さい。」と、いきなり持つて居た葉書を庭に叩きつけなさるんです。私だつてくやしいぢやありませんか。叩きつけたのは葉書ですが、そんな態度と云ふのがあつてもんぢやない。

私は私の頭を叩かれたのと同じに感じます。それには昨夜のお整さんの差出口にうんと腹が立つてゐるんだから、

「何時仰しやつたかそんな事は云つてやしません。只K家へいらしつても、私の事は云はないて下さい」とお願いしたんです、私は自分の事は直接先生に云ひ度いと思ひます。其方が萬事誤解がなくて好いでせうから、只それだけの考てお願いしたんです。」

「人がK家へ行きさへすりやあ疑つて、ええつ、くやしい。」

お整さんは齒を喰ひしはつて先刻庭へ叩つけたた葉書を、下駄でずんずん踏みつける。「お整さん。私
はかつとして「何をなさるんです。私をお踏みになるのも同じですよ。先刻から黙つてれば失禮な異似
ばつかりなさる。」

「整、前は何をするんだ。美禰さん堪忍してやつて下さい。本當に我儘者で仕方がありません。」と
姉さんははらはらしながらお整さんの手をとつて、さあ上へあがり、馬鹿が。」

だけれどもお整さんは矢張り姉さん達と一緒に外へ出るんだと云つて聞かず、K家へ行くんぢやない、
只そこいらを歩くんだと特に私に斷つて、遂々外へお出になりました。歸つていらしたたのは十二時前
でもありましたせう。私は構はず表の戸を引寄せたまま、自分の寢床をとつて先へ寢て居てやりまし
た。

その翌期が今朝になるんです。だから二人も無言の行に入るのは無理もないのでせう。

「ええつ、くやしい。行きませんよ、行かないでござんすよ。幾ら斯う云つたつて、お整さんがK家
へ行かないで居られるもんですか。現に今朝だつて行つたぢやありませんか。私は何も他人の自由を束
縛しようとは思はなければ、お整さんがK家へいらつしやるのをとやかく云ふんぢやありません。只あ
の人がKへは行かないの、散歩して来るだけだのと、殊更人の前に云つて置いて、それでそつと行つた
りとする。その行き方が氣に喰はない。」

お整さんから私の消息をK先生に通じられるより——それはお整さんが告口をなさるとは私も思つて
やしません、お整さんがK家へいらつしやつて、「如何だ美禰子は どうしてる。どんな風だ。」と自然先

生からお訊かれなすつて、知りませんといふ訣にも行きましますまいから、あゝだ斯うだとお答へなさる。
幾らお整さんが今の文壇で有望な女流作家で、觀察が面白いからと云つて、萬に一つ間違つた觀察を
なさらないとも限りませんからね。それよりは直接私が先生に出會つて申上げた方が好いと思ふんでは
が、まだ如何ともよく決心しないのに先生の前に出て、毒づかれたり、おひやら化されたりするのは嫌だ。
誰にも壓迫される事なしに、靜かに自分の本心に聞いて見たいと思ひますの。

(三)

遂に最後の日が来ました。

今朝K家の下女が来て、

「美禰子さん、旦那様がね、貴女の兄さんの番地をはつきり知りたいから、御面倒でも一寸巻紙の端へ
でも書いて下さい。それからお貸してある御本を皆な返して下さいませ。」と斯うなんです。

實は昨夜もK家へ行きませんでしたの。だもんですから、先生は怒つて、御自分で本郷の兄へ手紙でも
出さうと云ふので、それで番地を訊きにお寄越しになつたのでせう。併し貸しといた本を皆な返せとは
何の意味でせう。小栗風葉が眞山青果と喧嘩して、貸しといた毛布を夜中に押し掛けて行つて、引きまく
つて來たと云ふ話を聞いた事がありました、まさかそんな馬鹿げた訣ぢやありませんまい。けれども、
貸しといた本を皆な返せ、皆な返せと云ふのは何の意味だか如何しても解らない。場合が場合だけに變な
氣がします。

「先生は本を貸しとくのも嫌になつたのか。」

私はずんずん本箱から出して、一冊残さず智な風呂敷にくるんで持たせて返しました。

「そいぢやさよなら、又いらつしやいな。」

斯う下女が云つた時、私は「行くもんか誰が。」と本當にくやくつて涙がこぼれるのでした。

「貴女が餘り行かないもんだから、先生は折角早く歸つて待つて居て、待ちばけを喰つて怒つてらつしやるのよ。」とお整さんが取りなすやうに仰しやる。

「ふん、待合行きのお邪魔ばつかりしてお氣の毒だつたけれど、これからお邪魔しないからいいです。」

云ひながら久しく取り亂かした儘の机の上を片附けて居ると、お整さんは例の矢絢銘仙の着物に着更へて、ちよいと出て來ると仰しやる。昨年の十一月一緒に此家へ家を持つてからこつち、別々に出歩いた事と云つたら、歳暮に金策の爲め私が本郷の兄へ行く。其間にお整さんはお整さんて柏木の兄さんへいらした。それ位のもので、今度の事件が起つてから、私が二度一人で本郷へ行くと、お整さんが折々そこいらを歩いていらつしやる様になり、段々變な事になつて來た。だが私も別に「何處へ」とも訊かず、「左様ですか」と平氣なものです。

獨になつて考へれば考へる程くしやくしやして、今朝の先生の事が腹が立つ。一體これまでも、五先生、私、佐伯と此三人の關係を考へると、居たたまらぬ程かツとして、先生が怨めしくつて堪らない。戀の保護者だと自分からお誓ひなさるから、此方は一しやう懸命其つもりで、あらゆる秘密を打明けて手廻つて居ると、如何です、突然にお賣りなすつたぢやありませんか。あの有名な先生の出世作△△何

も彼もお解りてせうから、私は面倒臭い事を今更何も書きませんけれど、あの作が出た時だつて、私はまだ先生を信じ切つて、戀の保護者と頼んで居たんです。其後先生からのお手紙に、「自分が△△に書いた自分の心持は本當の事だ。」と書いて、「只その心持に支配されて了ふ自分か、自分でないかは貴嬢の判断にまかす。」と書き添へてあるのを見た時、私は無論先生を世にも尊い藝術家として仰ぎ見るばかりでしたが、此頃になつて思ひ當るのは、私が父につれられて故郷へ歸つた當時、「御身は今度の事につき、師としての我が態度にあきたらず、定めしはがゆく、口惜しくお思ひの事と存候。我が處置、わが態度御ゆるし下され度、思へばわれながら悲しく候。」と云つたやうな手紙です。其後再び東京に出て先生の家に居るやうになつてから、佐伯との戀は其儘に、一兩年中に結婚するさと思しやるかと思へば、佐伯のやうなものはとても成業の見込みはないと云つたやうな事をそれとなく云つて、文藝にたづさはる以上、人の妻になつては駄目だと仰しやり、私は先生の意のあるところを酌み兼ねるのでした。お整さんも矢張り左様ださうで、前に申上げました山村と云ふ男と、お互に「文學界」の投書家時代に知己になつて、戀になつて、まづ山村が上京し、それからお整さんの上京となり、上京當時は随分山村の世話になつて、殆んど半年間位も往復交際し、お整さんが五家のお使ひで何處かに行く時は屹度二人で行き、新宿の停車場を待ち合す場所にして、向島から田端、戸山ヶ原から中野と云つた風に、盛んに郊外を一緒に歩いたもんですつて。すがあの通り確乎してゐて、喜怒哀樂を色にも見せないお整さんの事ですから、うつかり人に氣取られるやうなへまはなさらない。あれ程永く一緒に居た私にさへつひ此間お打明けなすつた位で。それも破約になつたから仰しやつたのかも知れませんが。散々人に、佐伯さんと郊外を歩いた

事があるかの、郊外を歩いてよく知った人に出會はないものねだの、そらつとぼけて、さもさうした経験がないかのやうに訊いたりして、驚くぢやありませんか。兎に角山村との戀を何故半年限りで破約したかと云ふわけは、K先生が私に仰しやつて居た通りに、其内に好い配遇をめぐつけて結婚するさと仰しやるかと思へば、人の細君になつちや駄目だと仰しやり、知つてか知らずにか、先生がしきりに山村は駄目だと仰しやるものだから、少し男が嫌になつて来る、先生の信用を好い事に、こつそり出會つて居るのが空恐ろしいやうな氣もして、それで遂に破約を持ち出したんですつて。可哀相に、山村こそ好い面の皮ぢやありませんか。

だがお整さんのやうに、戀人の一人や二人突放す位の勇氣がなくちや、今の文壇に婦人て成功する事はむづかしいのかも知れません。

つまり戀なんかで先生の氣を悪くし、信用を無くする私のやうなのは、目先の見えない大馬鹿で、お整さんが伶俐なのかと思ひます。

斯う承知はして居ても、お整さんの真似の出来ない私は、生つきならしやうもないぢやありませんか。いつそ大馬鹿になつて、K先生の所謂テヤでもよろしい、一生佐伯の犠牲になつても好いつもりで歸つて行く事に決心します。

久しくあなたに手紙を書き馴れた此窓も今日限りです。代々木野は今櫻が若芽しかかつて、何とも云へない美しさですけど、此家は田沼整子と表札うつたお整さんの家ですから。私共はまた、同じ武藏野の何處かに好いかくれ家をみつめて今後はそこからあたよりを致します。さようなら。